あの顔あの声

岸田國士

門司から基隆まで

勿論船の上である。Ｔと名乗る男――彰化で料理屋を営んでゐる男――口髭を生やしてゐる男。

「こんなに静かなことは珍らしいです」

それはまた、両蓋の金時計を幾度も出して見る男――用が無くても船員に話しかける男――誰にでも飯が食へるかと訊ねる男。

「日清戦争の時、おやぢが通訳で……」

そのおやぢの写真を、取りに行つてゐるひまに、わたしは自分のキャビンに降りた。

香港

××汽船会社支店長――アルザス生れの仏蘭西人――青島で日本軍の捕虜になつた男――独身。

毎朝、モーターボートで店に出勤し、毎晩自動車で家へ帰る男。

「あゝ随分酔つた。わたくし、カツポレを踊ります」

――（勝手に踊れ）

「女は、日本の女に限りますね」

――（馬鹿、ネクタイでも結び直せ）

海防（ハイフオン）――××ホテル

「もう一つちよ……もう一つちよ……待てよ……来い、もう一つちよ」
「畜生、やれやがつた。それでいゝか」
「こゝへ来い……小さいの」
「大きいの出ろ、糞。ざま見やがれ」
雨がまだ降つてゐる……。
ボタリ！　イモリだ。チイツ！
「いやだよツ、このぢゝい、お放しよツ」
雨がまだ降つてゐる。

トンキンの真昼はかなし血の如き

木の実を噛める土人の女ら

盗みたる金を施す賊もありきなど
思ひ続くる一日なりしかな。

タラ　ラ　ラ　ラ　ラ　ラ　もう一つ

涙さへ見せぬ彼女なりき――
シヨウロンの浜の
夕ぐれの一と時

西貢（サイゴン）

波止場に近い酒場の一隅で、おれの手を握つた男——

「お前は何処かで見たことがある」と云つた男——
斜視（やぶにらみ）の大男——油じんだ浅黄の仕事服。
「もう行くのか」——と、その声がどうしてだか耳に
残つてゐる。

汽船アミラル・ポンチイの甲板

虎の爪を時計の鎖にぶら下げてゐる植民地守備隊の

軍曹。

赤いフランネルの腹巻をしてゐる安南人と仏蘭西人の混血児(メチス)。

ヂブチイの黒坊から駝鳥の羽根を買つた陸軍中尉の細君。

コルシカの島かげに立つ灰色の村を指して、「おいらの故郷(くに)」と叫んだ見習水夫。

馬耳塞から巴里への汽車中

十年間、マダガスカルの守備隊に勤めて、久々で故郷の土を踏む兵卒。眼の窪んだ、唇の厚い兵卒。

炎熱、労苦、倦怠、悪疫、脱営、監禁……それから、それから……。

聴いてゐる筈の相手が、一人減り、二人減り、三人減り……。

最後に、正面の男が、一人、不精無精聞いてゐる。新聞を拡げて、それに眼をおとしながら、時々、「へえ」「へえ」と気のない返事をしてゐる。

「これからが面白いんですよ」——兵卒は、その男の

新聞を取り上げた。

「何するんだい」——その男「ふざけた真似をするない。黙つてゐれや、好い気になりやがつて。そんな話は珍しかねえやい。熱い処から来て、頭がどうかしてるんぢやねえか」

兵卒は、黙つて唇を噛んだ。窓の外を見つめてゐるその眼から涙が落ちた。

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
１９８９（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
１９２６（大正15）年６月20日発行
初出：「文芸春秋　第二年第十一号」
１９２４（大正13）年４月１日発行
入力：tatsuki
校正：Juki
２００６年2月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。